

目次

I 物語絵を読む

一	国宝『源氏物語絵巻』を読む——〈御法〉図について……………	3
	はじめに——扇の謎……………	3
1	国宝『絵巻』中の扇……………	5
2	〈御法〉図の詞書……………	11
二	国宝『源氏物語絵巻』を読む——うち置かれた扇……………	17
	はじめに……………	17
1	〈東屋〉第二図の扇……………	18
2	〈御法〉図の扇……………	26
3	〈宿木〉第二図と第三図の扇……………	32
4	〈橋姫〉図の扇……………	38

三	国宝『源氏物語絵巻』を読む——〈橋姫〉図再説	45
	はじめに	45
1	構造としての図像解釈	46
2	〈橋姫〉詞書本文との対照	50
3	椎本巻のかいま見	53
4	詞書と画面図様との齟齬	58
5	〈竹河〉第二図	62
四	国宝『源氏物語絵巻』〈早蕨〉グループについて	69
	はじめに	69
1	〈宿木〉図の位相	71
2	〈早蕨〉グループの主題	76
3	〈早蕨〉グループの構成	79
五	几帳の陰の姫君——源氏絵から歌仙絵へ	89
	はじめに	89
1	『源氏物語』の几帳	90

2	源氏絵の几帳	97
	(1) 光吉画帖の末摘花図	97
	(2) 光則画帖と光信画帖	103
3	歌仙絵の几帳	111

II 歌仙絵を読む

一 絵画の中の〈泣く〉しぐさ考

	——佐竹本『三十六歌仙絵』と国宝『源氏物語絵巻』を中心に	121
	はじめに	121
1	佐竹本『三十六歌仙絵』〈斎宮女御徽子〉図	122
2	国宝『源氏物語絵巻』〈柏木〉第一図	133
二	『異本伊勢物語絵巻』を読む	143
	——住吉明神現形の意図とその絵姿	143
	はじめに	143

1	『伊勢物語』百十七段と『異本絵巻』詞書	144
2	『伊勢物語』百十七段と注釈史	146
3	住吉明神の多面性	149
4	住吉明神の姿形とその像容	151

三 歌仙絵〈在原業平〉〈紀貫之〉像の変容

——佐竹本『三十六歌仙絵』の継承と変容——

	はじめに	159
1	歌仙絵〈在原業平〉像の変容	160
2	歌仙絵〈紀貫之〉像の変容	166

四 歌仙絵〈中務〉像の借用

	——探幽歌仙絵盗作事件——	173
--	---------------	-----

五 小式部内侍と定頼

——『百人一首』秘話——

III 資料

一 『歌仙絵抄』・翻刻

緒言

翻刻	197	① 柿本人麿	200	② 凡河内躬恒	201	③ 大伴家持	202	④ 在原業平	203
⑤ 素性	204	⑥ 猿丸大夫	205	⑦ 藤原兼輔	206	⑧ 藤原敦忠	207	⑨ 源公忠	208
⑩ 齋宮女御徽子	209	⑪ 源宗子	210	⑫ 藤原敏行	211	⑬ 藤原清正	212	⑭ 藤原興風	213
⑮ 坂上是則	214	⑯ 小大君	215	⑰ 大中臣能宣	216	⑱ 平兼盛	217	⑲ 紀貫之	218
⑳ 伊勢	219	㉑ 山邊赤人	220	㉒ 遍昭	221	㉓ 紀友則	222	㉔ 小野小町	223
㉕ 藤原朝忠	224	㉖ 藤原高光	225	㉗ 壬生忠峯	226	㉘ 大中臣頼基	227	㉙ 源重之	228
㉚ 源信明	229	㉛ 源順	230	㉜ 清原元輔	231	㉝ 藤原元真	232	㉞ 藤原仲文	233
㉟ 壬生忠見	234	㊱ 中務	235	槐菴源顕祖書(花押)	236	跋文	237		

①	柿本人麿	240	②	紀貫之	242
⑥	山部赤人	250	⑦	在原業平	252
⑪	猿丸大夫	260	⑫	小野小町	262
⑯	藤原高光	270	⑰	源公忠	272
⑳	藤原敏行	280	㉑	源重之	282
㉒	源順	290	㉓	源宗于	284
㉔	女藏人左近 (小大君)	300	㉕	清原元輔	294
㉖	中務	310	㉗	藤原仲文	302
			㉘	大中臣能宣	304
			㉙	壬生忠見	306
			㉚	坂上是則	296
			㉛	源信明	286
			㉜	斎宮女御	276
			㉝	藤原朝忠	266
			㉞	藤原兼輔	264
			㉟	壬生忠岑	274
			㊱	僧正遍昭	254
			㊲	凡河内躬恒	244
			㊳	伊勢	246
			㊴	素性法師	256
			㊵	紀友則	258
			㊶	大伴家持	248
			㊷	藤原清正	288
			㊸	藤原元真	298
			㊹	大中臣頼基	278
			㊺	藤原敦忠	268
			㊻	平兼盛	308

あとがき

記憶に残る論文を書きたいとは筆者の念願するところだが、いつになっても思うにまかせない状況である。本書は絵画論としては『源氏物語絵巻を読む——物語絵の視界』（笠間書院、平成8年）に次ぐ二冊目だが、読者に対しては実に申し訳ないことで、意を尽くせたかどうか甚だ心もとなない次第である。

それでも前著が〈牛車〉や〈褰折傘〉をモチーフに見定めているのに対し、本書は国宝『源氏物語絵巻』に〈扇〉や〈几帳〉をモチーフとする視点で曲がりなりにも統一されている論考を収めることができているのではないかと思う。ただ単に国宝『絵巻』に関する論考を寄せ集めているというのではない点に著者の研究に対する姿勢を汲み取っていたければ幸甚なことである。

しかし、ここに到っても、例えば〈東屋〉第二図に於いて薫が手にする扇が風にのる薫の匂いを運ぶ役割を担い、画中にこの場に臨む薫の強い意思の表徴として機能していることを読み解きながら、その扇に何故薫の浮舟略奪の意向を帯することができるのかの問いには充分に応えていない訳である。

おそらくこの扇は、宿木巻で薫が中の君を訪ね、恋情を抑えかねていよいよ中の君に迫ることになるのだが、中の君は夫匂宮が夕霧の六の君を正妻にむかえるという辛い仕打ちに耐えかねて薫に宇治への同行を依頼していた矢先の対面場面に浮上してきたのであった。そこには「なよよかなる御衣どもを、いと匂はしそへたまへるは、あまりおどろおどろしきまであるに、丁子染の扇のもてならしたまへる移り香などさへたとへん方なくめでたし」（⑤四二三頁）と移り香に薫る「丁子染の扇」が、まるで薫の身体の一部かのように添描されていた。その「丁子染の扇」こそ

が〈東屋〉第二図に点出注視される扇なのだと思う。

中の君から紹介された大君の形代となる浮舟を、実現できなかった中の君との宇治への同行をまさにこれから実現させるべく薫はいま浮舟の居る三条の小家を訪れているのだと、〈東屋〉第二図の画面で薫が手にする扇は語るのである。しかし、それは既述した〈若紫〉図と〈御法〉図との対照連関性の如く国宝『絵巻』の構造化を同じく〈宿木〉図との間に検証できる訳でもないし、〈東屋〉第二図の詞書に薫が手にする扇に言及してもないので、画中の〈扇〉の意匠について中途半端な読み解きで終了せざるを得ないのである。

また拙論の矛先には各グループの主題性を見極めようとする検証も加わるので、場面選択の基準も他の研究者と異なってくるし、いちおう〈早蕨〉グループの主題を《翻弄》と見定めているにしても、〈東屋〉第二図で薫の手にする〈扇〉の意味・役割を過大評価すると自説の矛盾を惹起して瓦解に導くことになりかねないのである。〈扇〉というモチーフとテーマ性を切り離すことはできないにしても、一つのモチーフをもって全ての画中人物の思惑や行動原理を律することは不可能なので、あくまで〈東屋〉第二図に於ける薫が手にする〈扇〉は、薫の意向を代弁する喩としての機能にすぎないということなのである。

以上のように、意を尽せないこと、あるいは逆に自信をもって提言した説であるのに、従来の多くの説の中の一つに過ぎない受け取られ方をした歌仙絵論などが本書に収まっているが、単発での理會よりも一冊の本という形になることで、より深い理會が得られることを期待したいものである。

最後に初出論考を本書の目次に従う番号数字の順に、まず掲載書ないし誌名、出版社、発行年を記し、以下に原題を示しておくこととする。特に本論の主旨を変えるような加筆や削除はしていない。なお、Ⅲ 資料 は 本書に初めてその全貌を公開する架蔵の『歌仙絵抄』及び『三十六歌仙歌合画帖』である。

I 物語絵を読む

- 一 昭和女子大学「学苑」688（平成9年6月）「『源氏物語絵巻』を読む——〈御法〉図について」
- 二 昭和女子大学「学苑」829（平成21年11月）「国宝『源氏物語絵巻』を読む——うち置かれた扇——」
- 三 久下裕利編『源氏物語絵巻とその周辺』（新典社、平成13年）「国宝源氏物語絵巻〈橋姫〉図再説」
- 四 昭和女子大学「学苑」738（平成14年1月）「国宝源氏物語絵巻〈早蕨〉グループについて」
- 五 昭和女子大学「学苑」877（平成25年11月）「几帳の陰の姫君——源氏絵から歌仙絵——」

II 歌仙絵を読む

- 一 久下裕利編『物語絵・歌仙絵を考える——変容の軌跡』（武蔵野書院、平成23年）「絵画の中の〈泣く〉しぐさ考——佐竹本三十六歌仙絵と国宝源氏物語絵巻を中心に——」
- 二 中野幸一編『平安文学の交響——享受・摂取・翻訳——』（勉誠出版、平成24年）「『異本伊勢物語絵巻』を読む——住吉明神現形の意図とその絵姿——」
- 三 前掲『物語絵・歌仙絵を考える』「あとがき——歌仙絵の継承と変容」
- 四 久下裕利編『王朝の歌人たちを考える——交遊の空間』（武蔵野書院、平成25年）「あとがき——歌仙絵〈紀貫之〉像の変容」

（はじめに——加筆増補。採幽本『百人一首画帖』（業平）図の画像変更）

- 四 昭和女子大学「学苑」819（平成21年1月）「採幽歌仙絵盗作事件」

〔三十六歌仙〕〈中務〉 図（早稲田大学図書館蔵）と狩野探幽筆『百人一首画帖』模本（清少納言） 図（東京国立博物館蔵）を加えた）

五 昭和女子大学「学苑」855（平成24年1月）「小式部内侍をめぐる男たち——『百人一首』秘話」

著者 識

平成26年8月盛夏